

風薫る五月にふさわしい式典に

上 廣 榮 治

風薫る五月、いよいよ我が会は創立六十五周年を迎えます。それにしても、毎年やってくる創立記念日が、酷暑の八月でも厳寒の二月でもなく、花に浮かれる四月でも、草木が凋落ちようらくに向かう十月でもなく、風薫る五月であるということは、なんと喜ばしいことでしょうか。

薫風くんぷうとは五月の南風のことです。陽光にきらめく川面かわもを渡り、若葉に華やぐ樹々の間を吹き抜けてくるその風は、匂い立つような爽やかな気分を運んできて、私たちの心を明るく希望と活力で満たしてくれそうです。薫風といえど、正岡子規に「其人そのひとの足跡ふめば風かをる」という句があります。

まきがきに「芭蕉の細道のあとを辿りて」とありますから、「其人」とは、もちろん子規が終生追い求めていた芭蕉です。芭蕉が踏んだ同じ道を辿る子規は、薫り立つ五月の風に、ふと、芭蕉の心を感じ取ったのでしょうか。

私もまた、毎年この季節が巡ってくるたびに、「其人」、すなわち先師の心を改めて身近に感じるのであります。それは、先師が我が会を創設したのがこの季節だからというだけでなく、五月の風が運んでくる爽快感が、先師の説いた教えのあれこれを、ありありと蘇よみがえらせるからなのです。

先師はその生涯をかけて、真の仕合わせを実現する王道を説き続けました。数多くの著作に、その王道を歩むためのさまざまなノウハウを残しました。しかし、そのすべてをひと言で要約するならば、「明るく元気に今を生ききれ」ということに尽きると、私は確信しています。

そのことは、先師の最初の著作のタイトルが『明るい生活』であったことから明らかです。私たち一人ひとりが「明るく元気な生活」を実現する。さらにそれを、この地上に生きるすべての人々に広めていく。それこそが先師の究極の願いであつたに違いないのです。

万物が光と生気に満ちあふれるこの季節が巡ってくるたびに、私は先師の抱いたこの大願を思い起こします。もしかすると、先師は「明るく元気に今を生ききれ」という実践倫理の根幹を私たちに想起させるために、人々が希望と生きる力を湧き立たせる、この五月を選んで、我が会を創設したのではないかとさえ思えてきます。それほどまでに、風薫る五月の陽光は、先師が理想とした「明るく元気な生活」によく似合うのです。

さて、その六十五回目の創立記念式典も間近となりました。式典の準備をされている皆様の、まことに真摯で懸命なご努力には、頭の下がる思いがいたします。しかし同時に、「燃え尽き症候群」といわれる宴うたげ後の虚脱感についても、老婆心らうはしんながら、いささか心配をしております。

つまり、六十五周年を大切に思うあまりに、それをゴールと捉えてしまえば、ついに終わった、やり遂げたという思いが、それまでの緊張の糸を切ってしまうことを恐れるのです。

もちろん、それでよいはずがありません。何度か申し上げてきましたが、記念式典はゴールではなくスタートなのです。私たちの意欲と活力は、記念式典をスタート地点とする、その先にこそ発揮されなければならないのです。

六十五周年の式典は、六十五年の過去を誇り懐かしむ式典ではないのです。会友たちが積み重ねてきた六十五年の成果を祝うとともに、「これからいつそう頑張ろう」「もっと、もっと明るく元気な生活を築こう」「先師の大願を成就しよう」と、明日に向かって誓い合う機会なのです。

六十五周年の記念式典を起点として、新たなステージの実践に邁進する。それによってこそ、私たちはすべての日々を風薫る五月と同じ、生きる力と希望に満ちた日々に変えることができるのです。

ところで式典といえ、五月に先立つ三月四月は、年度の区切りのせい、さまざまな組織や団体の行事や式典が集中します。そうした催しに招かれるたびに、なかなか善い団体だと感心させられることがある一方で、かなり問題がありそうだと心配になる組織も少なくありません。

では、そうした評価の違いはどこからくるのでしょうか。そこに集う人々のマナーや態度を見れば、その集団のおよそのことはわかるものです。

まず落第点がつくのは、すべてに雑然として無秩序な式典や集会です。心が一つになっていないのです。集団とは、互いに協力することで一つの目的を実現しようとする人々の集まりです。心が一つになっていないのでは、集団としての意味を失いかけていと言わざるを得ません。

また、型通りに装い、型通りには振る舞っていても、無気力で無感動な人が多く見られる式典や集会もあります。集団の目的に共感し、その集団と共に自分を高めていこうという、意志も意欲も感じられないのです。たぶん、その集団はメンバーの一人ひとりを心から感動させ、発奮させるだけの意義や活力を、もはや失っているのでしょう。

これに対して、大声を張り上げ、気合ばかりを重視した集会というものもあります。不自然に肩に力が入りすぎた集会です。その硬直した対応や極度に緊張した態度は、見る者にまで緊張を強い、落ち着かない気

分にさせられます。その意味では、けっしてマナーがよいとは言えません。マナーとは、「人を楽しく快い気持ちにさせる」作法だからです。

また、作法や礼儀など形式ばかりにこだわった集会もあります。なぜ形式ばかりにこだわるのかといえば、空疎な内容を形式で補おうとするからでしょう。おそらく、その集団では、挙措動作の細部まで口やかましくマナーを咎め立てるといふ、最も悪いマナーが横行しているに違いありません。そのうえ、行き過ぎた礼儀作法は、ともすれば慇懃無礼いんきんぶれいという印象を与える点で、これもマナーに反しています。

ではどうしたら、「人を楽しく快い気持ちにさせる」ことができるのでしょうか。

それは言うまでもありません。まず、自分自身が楽しく快い気持ちでいることです。つまり、自分の役割をきちんと果たし、満ち足りて、上機嫌でいることです。相手の不機嫌がこちらの不機嫌を引き出すように、こちらの上機嫌は相手の上機嫌も誘うのですから。

とすれば、善き集団、善き集会の要件は明らかです。誰もがその集団に属し、集会に参加していることがうれしくて、上機嫌でいる集団です。上機嫌である理由は、その集団の目的や活動が自分のためになり、そのうえ、世のため人のためにもなっているという、満足感があるからです。

ぜひとも、六十五周年の記念式典は、風薫る五月にふさわしく、誰もが極上の上機嫌で集おうではありませんか。

東北関東大震災の報に接し、あまりにも多くの尊い命が失われましたこと、また、数多あまたの方々が被災され、極度の困難のうちにあることに衝撃を受け、心を痛めております。

いまはただ、亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された方々に、心よりお見舞いを申し上げるばかりです。

